

中世男色と破滅への道

——その果てに見えてくるもの——

上 村 一 実

はじめに

中世における男色は夕日が沈む瞬間と似た美しさがある。

朝日が昇るがごとく燦然と輝き、権力者の寵を受け高い身分に位置したり、男色の相手を支配し政治の駒として利用しようとしたり。しかし、日もやがて傾く。愛されていた美しい容姿も衰え、残ったものは過去の栄光。政治的に不利になると背を向けた人々。

男色によつての上がつた人は押しなべて自己崩壊の道を歩むことになる。その様子が美しいから「稚児物語」のような残酷な作品群が生まれたのだろうか？中世寺院の中の少年愛と院政期に院と近臣の男色を模倣し、自らの政治的ネットワークの拡大を目指した藤原頼長とその周辺に迫つてみたいと思う。

一 中世寺院の稚児たち

房内の稚児の席次をみると、公達—童形（稚児）—房官—修学者—侍という順列となっている。稚児は房官や侍や北面の子であつても、稚児として出仕する時は、父よりも上座に座すことになるのである。また、『右記』によれば、院家内での肉食すら、僧たちの「紅桃之寵愛」によつて半ば公然と行われていたという。稚児として出仕は出自以上の待遇を伴うこともあり、それは童の奉仕者の一つの特権でもあつただろう。

しかし、そうした特権を得ていた稚児もやがては年をとり、容姿が衰えるにつれ寵愛を失つてゆく。そうした稚児の悲劇の例として覚法法親王に寵愛された狛則康と、興福寺大乘院尋尊に寵愛された愛満丸の例をあげたいと思う。⁽³⁾

① 狛則康

狛則康は左舞人狛光時の子。覚法は彼を寵愛するあまり、鳥羽院の北面の武士源則遠の養子とし、院北面として元服させたという。それは童の出仕者が元服して男となった後も、貴人の身辺に近侍するためにとられた措置であり、院の北面の武士の子が童の寵童として仕え、元服の後にも北面にも祇候して近習となる例にならったものであった。

則康は二十二歳の時、改姓の申文を提出して狛の旧姓に復し、左舞人の列に連なることになった。それは覚法の寵愛が彼から離れたことも物語っている。(弟の二郎に寵愛が移ったのだ。)舞人となった則康だが、その男舞はもてはやされることはなく、摂政忠通に「美ならず」と酷評されるほどであった。そして、則康は二十九歳の時、突如発狂し遁世する。

② 愛満丸

興福寺大乘院尋尊から並外れた寵愛を受けていたが、二十八歳という若さで自殺した。愛満丸の父は散所者と呼ばれる賤民であった。尋尊の愛満丸に対する寵愛は並外れたものがあり、彼は愛満丸の人身の一切を所有する身曳状を取っている。愛満丸は、猿楽者の子という散所の雑芸能者に所属する身分から、稚児男色の対象として

人身売買にも等しい形で尋尊にその身柄を買い取られているのだ。しかし、そういった私的な寵愛とは関係なく、尋尊は賤民に出自を持つ愛満丸を、興福寺の衆徒として寺院社会内に籍を置く形で出家させることも、成人男子として元服させることもなく大児として二十六歳まで垂髪で過ごさせた末に遁世させた。遁世とは、僧官僧位を持つ僧侶となる、寺院社会内の行為である出家とは異質の存在である。

遁世して丞阿弥と名乗るようになった愛満丸は患いの末、文明六年(一四七四)四月五日、自害を遂げている。尋尊という権力者による稚児男色の対象としての寵愛が、唯一賤民身分からの脱出と立身を保証することの果ての、稚児という自己同一性を保てなくなつた年齢の死であった。

この二人にはいくつかの共通点がある。

1. 芸能者の出自をもつ(同時に僧に寵愛を受けた稚児でも平経盛を父にもつ平経正や、在地領主クラスに出自をもつ侍身分の愛千代丸は元服・加冠して成人(俗人)の男性となっている)
2. 師匠の僧から並はずれた寵愛をうけ、個人的に所有される措置をうける(狛則康の場合、北面武士の養子。愛満丸の場合、身

夷状を取られている)

3. 少年の美の時代が終わり精神的に壊れてしまう(愛満丸の場合、自殺してしまう)

『右記』では「師匠に奉仕し、毫釐(わすかも)もその命に違ふことなかれ」と、師匠に対する稚児の絶対的な服従が説かれている。時に師弟の関係を父子に擬え、君臣に擬える『右記』であるが、そこに垣間見えるのは師匠の僧に絶対的な服従を強いられた稚児の姿である。ましてや、賤民に出自を持つ愛満丸や狛則康のような者にとってはその関係は主従関係に近かつたと思われる。その服従故に寢室にまで奉仕するのは当然の成り行きであつたらう。

支配する側の僧侶が狛則康の場合、北面武士の養子にまでして、長い時間自分の傍に侍らせようとした。愛満丸の場合、身夷状を取つてまで愛満丸の身体を支配しようとした。「それほどまでに寵愛が深かった」と言つてしまえばそれまでだが、それは一人の人間を独占したいという欲望からきているものだと思う。そして、その欲望が満たさせるのは、その稚児の出自が高くないことも由来するのであろう。出自の高くない稚児にしてみたら権力者によって稚児男色の対象としての寵愛を受けることは、唯一彼の賤民出身からの脱出と立身を保障するものなのだ。

北面の武士は白河院政末期には稚児の世界と同じように上、下に分たれ、諸大夫の家格の者は「上北面」それ以外は「下北面」または「北面下臈」と呼ばれることになった。後世「北面の武士」といわれる者のほとんどが「下北面」である。北面の武士については明らかにされていないところが多いが、米谷豊之祐氏の研究によつて寵愛を受けた下北面の出世コースの事例が明らかにされている。その例をいくつか見ていきたいと思う。

① 橘頼里

父祖は武者の郎等で七、八位の位階を有していたと思われるが詳しくは不明。確かなのは相撲人の家の出身ということだけ。寛治四年(一〇九〇)に白河法皇の祖母陽明門院の院分として任じられて以来、れつきとした越中守なのである。滝口として内舎人を兼ねさせられたことから白河帝に寵せられていたことがわかる。承暦三年(一〇七九)十八歳時に早くも衛門尉への昇任が同督の源俊明から奏請されている。(『除目申文抄』)この時代では、内舎人は卑官となつており次の昇進は兵衛尉なのが普通。白河院は頼里を長く傍に侍らすことができる検非違使にするためにスキップ出世させたのだ。

頼里は北面組織の整備過程、三十八歳で死んだが、彼に続く盛重

や爲俊ら下北面の先輩として、彼らの官途の典型となった。

② 平爲俊

素性不明。小舎人童であつた真实性が高い。当時家格が低く学芸諸道をも習得していない輩が立身するために衛門尉に任じられることだつた。その爲白河帝が将来爲俊を衛門尉に抜擢任用するために使大夫尉の経歴者章俊の猶子にした。寛治四年（一〇九〇）四月九日には左兵衛少尉となるが、同六年正月には早くも檢非違使に登用された。院が片時の間も彼を側近から離したくなかつたからだろう。その年齢は二十一歳頃と推測される。院の彼に対する傍若無人の寵愛ぶりが伺われる。

しかし、爲俊の郎党たちが武者として良質なものではないと共に、爲俊自身も統率者としての資質に欠けていたためあまり檢非違使としての仕事はできなかつたようである。

爲俊に対する院の寵用はそれからやがて衰え、以後他の使尉と格差のない扱いを受けることとなつた。その原因は能力がない以外に容色の衰えが考えられる。

③ 藤原盛重

素性は様々な説があるがあまりはつきりとは分かつていない。周

防国住人であること、「百姓の子」という記述もあるが『十訓抄（第一の四十一話）』その実は郡・郷司か庄官の子であろうかと推測される。

『平家物語』『源平盛衰記』では彼が千手丸（爲俊）と共に白河院に寵せられ、北面における左右なき切れ者であつたと記すが、爲俊とは異なり容色に因る寵用とは考えられず、従つて檢非違使尉登用は彼よりほぼ十年遅れている。しかし使尉以後の盛重はその才気を十分に發揮し、後四ヶ国の受領を歴任した⁽⁵⁾白河院政から鳥羽院政への交代期には、鳥羽院へも巧みに取り入つた盛重は信濃守任終後も肥後守に任ぜられる。

話を稚児に戻したいと思う。今見たとおり、寺院においての寵愛を受けた出自の低い稚児と院政において寵愛を受けた北面の武士との間には共通点が見て取ることができる。

1. 仲間のヒエラルキーの中で下のほうに位置する。しかし、権力者の寵愛をうけることでそれを克服することができる。
2. 寵を失えば待遇が変わる可能性がある（藤原盛重のように彼自身に能力がある場合はのぞく）。
3. 権力者の寵が深あまりに、特別な処置をとられる（北面の武

士の場合、檢非違使にして長く側に侍らせるための早い出世。

しかし、稚児と北面の武士とは歴然と分かる違いがある。愛満丸、伯則康は年齢を重ね青年になるにつれ、アイデンティティーを保てなくなり自己崩壊してしまう。それに対し寵が離れ、他の使尉と同じような境遇になつても平爲俊は自己崩壊することはない。院への忠勤も始終不変であつたようで、院の崩御に際して鳥羽院からひきつづき院及び女院の北面に候すべき旨の優詔（ゆうじょう）を賜つている。なぜこのような違いがでるのだろうか？それは社会との関わり

の違いではないかと思う。出自の低い稚児では、衆徒として寺院社会内に籍を置く形で出家させることも、成人男子として元服させることもできず、遁世させるしかない。遁世とは、寺院内部に籍を置き、僧官僧位を持つ僧侶となる寺院社会内の行為である出家とは異質な存在である。寺院は国家の許可によつて成立していた。莊園を獲得し、巨大な莊園領主にもなつていた。いわば、宗教界は官界に付属するもう一つの俗世間となつていた。官位は国家からもらうもの。それをもつていない遁世した僧侶は社会的に地位がないことにな

る。

謡曲『花月』において京都清水寺で曲舞を舞う花月（人商人に扮

わかされ、清水寺門前の者に身柄を買われ雑芸を演じつつ旅僧に男色の対象として買得されていたと思われる）は花を散らそうと鶯を弓矢で狙おうとする。そして彼は刀は持たず、弓のみ携えている理由を「花月が身の敵のなければ、太刀刀は持たず、弓は的射んが為」と説明している。中世社会において、刀・脇指とは、農民をはじめとするすべての人々にとつて、自己の属する社会で自立した成員であることが認められたことを表示する、成人男性の標識であり、自己救済能力の標識とされたものであつた。成人男性の標識をもたないのは遁世した僧も同じである。

北面の武士における男色は藤原盛重に見られるような、社会的に有利なポジションを得るための道具であつたとみて良い。檢非違使という役割が院の側に少しでも長く侍る為に用意された地位であつても、刀・脇指をもち成人男性としての標識を持つている限り寵愛がなくなろうと、青年となり容姿が衰えようと自己認識を失う原因にはならないのだ。

幼いころ、身分が低い故に権力者に所有され、容姿の衰えと共に寵愛が失われていく。それまでの「自分が自分であるだけで特別」であつた環境がすべて変わるのだ。そのことで、アイデンティティーを保てなくなり、自己崩壊を招いてしまう仕組みこそが中世寺院の世界の本当の恐ろしさである。

二 頼長にとつての男色

(一) 男色による支配関係

頼長にとつての男色とは本来政治ネットワーク形成のために支配のための男色で、しかし頼長は、藤原忠雅、藤原隆季、源義賢との関係で受身の地位をとり「景味」と快感を覚えた事を彼の日記『台記』に記している。

ネガティブな趣味としての男色。「佐伯貞俊」「舞人公方」「源義賢」「秦公春」「雑色弥里」など身分の低い者達との「遊び」としての男色ならばよい。しかし政治的に利用しなくてはならない相手との行為で頼長が支配されるような状況はあつてはならないのだ。

現に、隆季は初め頼長と関係をもつことをなかなか応じなかった。しかし義兄忠雅の媒で関係が生じると、羽林の官（近衛中将）になる望みを伝えてきた。頼長と関係を持つことはそういった打算の上になり立っていたのだ。隆季の弟家明は永治元年には少将となっており隆季は弟に遅れをとっていたのだ。嫡男として父家成の地位を継承することを考える隆季としてはなんとしても羽林になりたかった。頼長は隆季に政治的に利用されていたのだ。成親も兄たち同様に頼長と関係を持っていたがやがて頼長と離れて院との関係に望みを繋げ、ついに待望の近衛の少将となることができた

男色とは支配・被支配関係が恒常化し二人の間に主従関係が芽生え、情によつてつながつてくることに意味がある。しかし、それはあくまでも政治的に利用するならば、隆季・成親兄弟のように自分の利益になるかならないかで割り切つた関係でなければならぬ。ましてや、武士の義賢に支配されるなどもつてのほかだ。

頼長の男色を「濫吹」と暴力を表現する言葉を好んで使つていたことは、「暴力」「武力」に対する憧れのようなものも見えてくる。憧れをもつことで潜在的に頼長は院政内部で末端にいたと思つていた「武士」に負けていたのではないだろうか？

頼長は子孫に対する訓戒も日記の中に書いた。その中に「鷹犬・牛馬・酒色」を厳しく禁止している。鷹や犬といった狩猟や馬芸を忌避した彼が、戦場で命を落とすのは非常に皮肉な話である。

(二) 夢にまでみる怖い女

頼長は日頃「諸大夫の女」と蔑み嫌つていた美福門院得子に対して、恐れを抱いていた様子が見て取ることができる。自分の養女多子入内の直後、得子の養女呈子入内の噂を耳にする。そしてその呈子が兄忠通の養女となったことを知る。多子入内直前の久安六年正月六日条には頼長は「女等謀議して入内を防ぐ」ことを夢に見ている。そして早速陰陽師に夢祭を行わせるといふ有様であった。頼長

にとつては養女皇子の仕掛人は忠通なのか得子なのか、鳥羽院なのか分からなくとも、頼長には、男達を良いように操る妖婦得子にみえたのだろう。

皇子の入内に差をつけるために、多^た皇子の立后を企てた。そのとき頼長に力を貸すために宇治から来てもらっている父から、法皇の寵妃美福門院に懇願するようすすめられる。しかし、頼長はそれを渋った。頼長はしばしば得子を取り巻く伊通らに対して「媚を皇后に求」と罵声を浴びさせているからだ。自分も同じように思われるのは彼のプライドが許さなかつたのであろう。

しかし、このプライドこそが頼長のアキレス腱ともいえる。

父忠実の白河院による内覧停止、政界追放の原因は白河院の待賢門院璋子への寵愛によるものであつた。権力者の寵愛をうけた女は強い、そして恐ろしい。忠実は宇治に籠居^{籠居}している十一年もの間、骨身にしみてそれを思い知つたであらう。それゆえ、白河院の死後政界に復帰し鳥羽院の得子への深い寵愛の様子をみるや否や、まだそれほど権勢を誇っていなかつた彼女が皇女を生むと直ちに娘養子の養女とし扶養のすべてをした。過去の失敗から寵愛を受ける女とは敵対するのではなくいち早く関係を結ぶことの方が自分の利となることを学んだからだ。それは父の失敗を見ていた兄忠通も同じことだ。

そのころ、頼長は生まれたばかりで勿論のこと記憶などない。頼長が宮廷人として籍を得たのは大治五年（一一三〇）十歳の時であつた。父の政界復帰が長承元年（一一三二）十二歳の時である。頼長は父の庇護のもと急速に官位の昇進を遂げていった。いわば温室育ち、苦労知らず。頼長がいくら「日本第一の大学生」とまで称される大学者であつたとしても、父の失脚の後、二十四歳の若さで反摂関家的な白河院政のもとに十一年の歲月耐え忍んだ経験をもつ兄忠通とは政治的手腕が違うことは言うまでもないだろう。

頼長は権力者の寵を受ける女の恐ろしさを、何も分かつていなかったのだ。

頼長の女性排除をしめすエピソードがある。頼長と藤原隆季との漢詩の応対で、隆季からの書簡には漢詩だけでなく和歌も添えてあつたのである。しかし頼長は「不堪に依りて和歌せず」などと注記して返歌せずに済ませてしまつている。あえて歌は詠まない。男同士の友情の証たる詩の贈答はおおいに奨励されても（頼長は和歌も漢詩も苦手であつたようだが）男女のコミュニケーションの具たる和歌は、女手による軟弱な文化メディアとして頼長の到底認め得るものではなかつたのではないだろうか。

(三) 尊重する女

男色家で知られる頼長だが、女性に対して性的関心を抱かなかつたわけではない。むしろ嫡妻幸子が久寿二年(一一五五)六月一日、四十四歳で死去した際愛妻家としての一面を見せている。先例を重んじる頼長が、内覧の人が妻の葬礼で歩行する例など未だかつてない、と人に非難されながらも、歩いて葬礼に従うという丁重な葬礼を行ったのだ。

頼長の母はおそらく彼が幼いころに死去したと思われる。頼長の生母の父土佐守藤原盛実、摂関家の家司として長年忠実の近くに仕えていた。恐らくその縁によつて盛実の女も忠実の身近に仕え、一子をあげるに至つたのであろう。この母の家柄は醍醐天皇の母贈皇太后胤子の生家として一時宮廷にときめいたが、皇室との血縁が疎遠となるに伴つてその家運も傾いていった下流貴族であつた。その女と村上源氏の右大臣頼房の娘である兄忠通の母師子とでは、その出自において格段の違いがある。頼長自身も「母の賤き」を自覚していたようだ。

頼長の養育において大きな役割を果たしたのは二人の乳母であつた。

一人は土佐といつて頼長の生母の姉である。子を産んだことがなかったので哺乳はしなかつた。もう一人が実際に哺乳した乳母と思

われる備後である。この代理母備後との熱い関係が康治二年六月六日の条にのつている。頼長とその生母の生家との間には終始深い関わりがあつた。盛実の男頼憲を始め、その子盛憲・憲親・経憲はみな頼長の家司として近習し保元の乱においてすでに故人となつていた頼憲を除いて、盛憲・憲親・経憲ら三兄弟は最後まで頼長の身近につき従ひ、乱後みな遠流に処されている。このことは頼長が有力な近習をもたず、晩年宮廷社会に孤立してしまう原因の一つといえる。

(四) 母なるものと、力をもつ女

頼長が近衛帝崩御の後、自分が新体制からことごとく外される理由を、自分と父忠実が近衛天皇に呪詛をかけ、殺したと得子が忠通と謀つて噂をながし、鳥羽院もそれを信じて父子を恨んでいるからだという趣旨のことを『台記』に書き残している。

皇太子は美福門院の養育するところ、しかるに頼長はここ三年女院のことを勤めず、まして自ら亡きあと忠を尽くすとはとても思えない、こんな男をどうして東宮傳に任じ得よう。

頼長が東宮傳に任せられるよう父忠実が高陽院泰子を通じて申し入れたことに対する鳥羽院の返報がそのまま記されている。

神田龍身氏はこれを、どこからどこまでが事実で、頼長の妄想で

あるか区別がつきにくいと述べている。女の猛威にひたすら震える頼長の被害妄想かもしれないと。もちろん、この説についての真偽は分らない。しかしここで東野圭吾氏の『悪意』という小説を思い出した。犯人が小説の初めて捕まるといふ一風変わった推理小説だ。しかし、事件発生から捕まる前までの日記に嘘を書くことで本当に隠しておきたい事件の動機の真相を遠ざける。この小説は犯人の日記と真相を追う刑事の捜査記録の交互でなりたっている。「記録」は事実を記すものであり「日記」は真実だけでなく書き手の創意を加えられる可能性のあるものだ。日記と記録の違いを巧みに使った小説である。

では、頼長の「日記」に記されたこの記事が彼の創意だったとしたら。もちろん読み手に意図して伝えたいことがあつたからだろう。

「自分の政治力の低下の原因。それはすべてあの女のせいなのだ」と。

頼長は妻幸子・乳母の土佐と備後はものすごく尊重し大切にしていた。私はこの三人の共通点を「母なるもの」と見て取ることにする。頼長がどんなに「女」を見下し政治的に排除しようとしても、頼長が生まれてきたのは母なる女である。その女を否定する事は自分の出生を脅かすことになる。だから「母なるもの」に対しては厚く遇するのではないだろうか。

『台記』をみると、和歌に堪能な兄忠通の姿が描かれている。父忠実が頼長の事を「経史二通ズ」忠通は「風月二長ズ」と評した。久安六年十二月四日の条、頼長は自分との違いを強調するためか忠通の詠歌をわざわざ引用している。女との共闘を厭わないのも忠通だし、また逆に忠通主催の男色ネットワークなるものはどこにも存在しない。

待賢門院璋子と恋仲になった藤原季通。他の同母の五人兄弟みな出世しているのに彼だけが左兵衛佐を免ぜられ出世コースから外れ散位のままその生涯を終えた。その原因はもちろん璋子との恋仲が白河院に知られ怒りをつたえたことだ。女への恐れは本来、女院の背後にある権力者に向けられるのが本当なのではないだろうか。頼長は女院を恐れすぎた。兄忠通のように利用することができなかったのだ。そう、兄忠通は得子を利用していただけではないだろうか。忠通は得子、鳥羽院に利用されていたという解釈もあるようだが、ヘーゲルの主と奴の弁証法ではないが、「利用されているようで、利用していた」のではないだろうか。「風月二長ズ」と評された人当たりの良い忠通は「柳に風」のような強さを感じる。

頼長の「悪左府」という異称は常日頃学問・公事に精進し、賞罰をわがち、善悪を糺す彼の生活態度に対し、時の人が「悪左大臣」と言われたように諸事にすぐれて、しかもきびしい人柄に対して畏

怖の念を表わした異称とみるべきであろう。頼長は敵をつくりすぎた。兄忠通が院の近臣とうまく付き合っているのに対して、見下す姿勢を最後まで変えようとしなかった。有職者の称揚した藤原伊通に対してさえ、一方では「媚を皇后に求む」と非難しているのをはじめ、得子や家成らに追隨する廷臣にも同様の悪罵を浴びせて、みずから孤立の道を歩んだのだ。「頼長のプライドの高さこそアキレス腱である」と述べたのはこのためである。

しかし、頼長のこのプライドの高さは自分が摂関家の家系の男というところからくるのではなく、兄忠通の母師子と比べて自分の母の出自の低さからくるコンプレックスからではないだろうか。

頼長は女に負けたのだ、自分の中の内なる母に。

おわりに

今回、中世の男色としての寺院の中の稚児と、男色を政治的に利用し院政権力に対抗し摂関家の復興を期した藤原頼長を中心に論じてきた。中世寺院の稚児は男色の対象とされる時、「稚児灌頂ちこかんじょう」という特別な儀式を経て仏の化身としての「聖なる存在」となる。

「聖なる存在」である稚児と交わることは聖なる行為とされる。しかし、実際の稚児は仏の化身などではなく生身の人間だ。出自の高い者は良い、少年時代の美が失われても出家するなり、元服するな

り、それなりの道がある。しかし、出自の低い者にとつては僧の寵愛を受けることは賤民身分からの脱出の唯一の方法である。日々刻々と自らの「少年の美」は失われていってしまう。出自の低い稚児は再び賤民身分に戻るか遁世するしかないのだ。遁世した僧は社会的に地位がない。同じように権力者の寵愛に頼ってヒエラルキーの下部からの脱却を図る北面の武士との違いはそこにあることが分かった。彼らにとつて男色は社会的に有利なポジションを得るための道具なのだから。成人男性の標識をもっているか、いないか。それが自己崩壊を招いてしまうか否の違いだったのだ。

こうした稚児たちとは逆に、院と近臣との主従関係を真似て男色による政治的ネットワークをひろげ、支配していきながらも保元の大乱で敗者となり命をおとした藤原頼長の敗因について見ても論じた。稚児の論理から言えば、頼長は破滅の道を歩まなくても良いはずである。しかし、そんな頼長の陰には常に畏怖すべき「女」がついてまわった。己の理想とする政治形態を作り上げるために男色を駆使し、女性を排除した頼長であつたが最後に敗れたものは己の中の母であつた。

注(1) 守覚法親王の『右記』の「老若甲乙消息事」の中の房中の序列に關しての条による 土谷恵 「中世寺院の童と兒」『史学雑誌』一〇一

の一 一九九二年。

(2) 土谷恵 「中世寺院の兒と童舞」『文学』六の一 岩波書店 一九九五年(中世寺院の社会と芸能 吉川弘文館)。

(3) 細川涼一 『逸脱の日本中世』 筑摩書店 二〇〇〇年。

(4) 米谷豊之祐 「院北面武士追考―特に総始期について―」『大阪産業大学論文集 人文科学編』一九九〇年/〇九 通号七〇。

(5) 石見守(七年) ↓相模守(七年) ↓信濃守(五年) ↓肥後守(四年)。

(6) 注(4) 『長秋記』には「昨日信乃守盛重別進巨多也、上皇不_レ堪_レ御感、召、男盛道於臥内、云々」と記されている。

(7) 忠通は表向き璋子を尊重することで娘聖子を入内させることに成功した。

(8) 神田龍身 「男色家・藤原頼長の自己破綻」(小嶋菜温子編『王朝の性と身体―逸脱する物語』一九九六年)。

(二〇〇八年 卒業)